



雨水利用を進める全国市民の会

会長 辰濃 和男

〒131-0032 東京都墨田区東向島1-8-1

TEL: 03-3611-0573

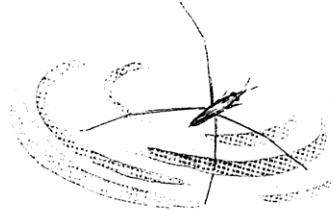
FAX: 03-3611-0574

H.P: <http://www.network.sumida.tokyo.jp/amamizu/>

雨水利用自治体・市民フォーラムを終えて

「雨水利用」のこれから

■会長 辰濃 和男



つい先日、北海道の知床へ行った時「鳥獣供養塔」というのを見ました。人間の暮らしのために死んでいったものへの哀悼の念をこめて、人びとは塔の前でぬかづきます。供養塔の背景にあるのは、大自然への畏敬の念です。山の神様の下さったものへ祈りを捧げる気持ちです。私たちは、雨水について、それに似た敬虔な気持ちを持っていだらうかと考えました。

答えは否です。むしろ、雨をうっとおしいもの、いやなものと思いがちです。私たちは不遜にも雨水利用という言葉を使っていますが、これを心で読むときは「謹んで雨水を利用させていただきます」と読んだほうがいい。雨水をモノではなく、万物をはぐくむ命の源と考えましょう。雨への敬虔な思いがあるかどうか、自分の心を見つめましょう。

今回の『雨水利用自治体・市民フォーラム』は、行政の人、市民、それに関連企業の三者が一堂に会して共に雨水利用を論ずるという画期的なものでした。雨水利用は実に多面性をもっていることもわかりました。雨をためるだけではなく、雨水で池を造り水辺を遊び場にする、水琴窟を造る、天井冷房を造るといったさまざまな報告がありました。

このフォーラムで、私流にいえば「謹んで、雨水を利用させていただく」運動について、若干の提言をしました。

①地方自治体の水循環行政を担当する方は、水循環行政の一元化のために努力していただきたい。

②雨水利用への大幅な助成策、料金体系の検討を。雨水利用者への下水料金はタダにすべきです。

③地方自治体は、公共施設の雨水利用を義務とし、公有地（校庭など）に降る雨の地下貯留を考えていただきたい。

④大規模な建物の雨水利用を建築基準法で義務づけることをめざしましょう。

⑤技術者の養成も急務です。雨水利用の建物の設計、維持管理の専門的技能をもつ建築家の育成を。

⑥教育の問題。各学校に雨水タンクを置く、水の汚染度を調べる、水槽やビオトープを自分たちで造る、といった営みを実践しましょう。

⑦第三世界では、急速な都市化で水不足が心配されています。雨水タンクの寄付、雨水利用の技術的援助を考えるべきでしょう。

⑧国際雨水センター（仮称）を創りましょう。世界中の情報を受信し、発進し、蓄積し、研究を進め、地球規模の雨水利用を前進させる拠点をぜひ実現させましょう。

フォーラムでは、ドイツの技術者が、節約型トイレの話をしてくれました。日本では流す水量が一回20リットルを超えるのが普通ですが、ドイツやスエーデンでは6リットルから3・5リットルの水量のトイレが出回っているそうです。「もったいない」という言葉は「物の本体を失する」という意味です。雨水を無造作に下水に捨てることも、雨を汚すこととも、その本体を失することです。

雨水利用運動は「もったいない」精神を呼びます運動でもあります。

雨水利用自治体・市民フォーラムに参加して

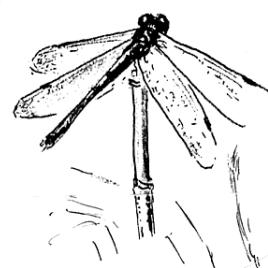
雨水利用 グローバルネットワーク会議

渡辺 隆子

市民と行政が一緒に雨水利用を進めようと確認し合った上で、2日目のグローバルネットワーク会議が開催された。

市民、企業、行政……と、それぞれの分野での活動報告をきくと、いよいよ雨水利用の情報を一つにまとめる時がきた、と感じた。残念ながらディスカッションする時間はなかったが、現在、バラバラにある雨水情報を集約し、全世界への拠点機構をつくろう、という提案がされた。具体的には、「雨水利用情報センター（大林組・小川幸正氏）」や「国際雨水センター（（財）地球環境戦略研究機構・グレン・パオレット氏）」など、必要としている人が知りたい情報を得られるセンターの設立である。活動を通じて生まれた雨水利用の“芽”が育つよう、国際協力や地球規模のネットワークの展開に期待したい。

また、沖縄県の伊礼氏の話が深く印象に残った。「水の供給者の立場であるにもかかわらず、上水道を使わない政策を進めることへのジレンマは確かにあった」と述べ、しかし、このまま上水だけを進めていけば、最後にそのツケが市民への負担となると判断し、雨水利用を支援する制度を導入した、ということだ。市民が望んでいることを行うのが行政である。そのことを忘がちな昨今の日本ではあるが、これが本来の姿なのだ。



香川県から参加して

香川雨水利用を進める会
会長 加藤 俊作

水は私たちいのちあるものにとって不可欠のものであるだけでなく、地球の温度コントロール、二酸化炭素濃度の制御にも大きな役割を果たしています。人間活動によって、地球環境を変動させ、温暖化による異常気象、都市化、ダムの建設、河川改修等様々な開発により、水管理にも大きな変動を引き起しつつあり、21世紀を見据え、かぎりある水資源を大切に有効利用する必要があります。

私たちの身の回りにある水から大切に管理していく一つが雨水利用であります。各地の自治体及び市民が一体となって雨水利用を推進しようとする熱意が感じられました。今回のフォーラムでは墨田区をはじめ多くのボランティアの方々によって支えられ、盛り上げられていたことを感心致しました。

2m³のミニダムを1千万世帯で整備すると常時2千万トンの水を貯水するダムを保有することで、年間で100%の雨水を各家庭で利用すると約10億トンの水を節約することになります。一基50万円で整備すると5兆円の消費を生み、各家庭において1~2割の節水が実現されるのです。環境破壊や予想以上の短時間での老朽化などの問題あるダムに比べ、管理が容易なミニダムの普及、水と親しむ機会の拡大が重要となります。

さらに、水質改善、設備の改良のみならず、雨水利用への関心を高める運動の必要性を感じました。

雨水利用自治体・市民フォーラムに参加して

ポスターセッション

こころ惹かれた子ども達の活動

◆ 宮村 昌幸

千葉県八千代市立村上小学校でのお話し。ある日、校庭が雨で水浸しになった。2年生の笠井先生のクラスの子供たちは「雨水が鏡に変身したッ」「魔法の水みたい。集めたいね」と大騒ぎ。

福岡で渴水を体験した子がいて、「夜11時まで水がないんだよ。お風呂は週に一回しか入れなかっただし」。このひとことから、たくさんの、雨を集める子供たちの実験が始まった。

今年のポスターセッションには、80点あまり展示されていた。狭いスペースに、たくさんの人たち。通路をすれ違うのもシンドイ。200人はいるだろうか。そんな中で、私が気に入った実践例が、この村上東小学校の「雨集め大作戦」であった。

作戦その1。砂場で大きなビニールシートをすべり台のようにして雨水を集めます。



作戦その2。ジャンボビニール袋を広げて、手に持つて雨を集めます。60リットルも収穫しました。

作戦その3。体育館の雨樋からゴッソリ雨水をいただきます。1時間で180リットル。

ところで、体育館の屋根面積は校庭の32分の1しかない。計算したところ、校庭に1時間降る雨の量が、児童数700人の学校で使用する、一ヶ月の水道水の量に匹敵するものであったという。ううへん。なんて雨水を無駄に流しているんだろう。

これからも、ユニークな実践を期待したい。

雨水利用交流会

熱氣と酒に”酔いました”

◆ 今関 久和

17:40、地元のお囃子が歓迎するなか、14階の会場にどっと人が上がってきた。

10数卓のテーブルには花が飾られ、酒類、ジュース、それに手作りの料理の数々。朝から大忙して準備してきた女性陣は、用意万端とのって、浴衣姿でむかえてくれた。

広い会場が、あっという間に人で埋まってしまった。大成功だったフォーラム各会場の熱気をそのままに、「雨水交流」の輪がそこかしこにできる。

辰濃会長の挨拶、川柳の表彰式（高校生の活躍がめだった）と続き、話にもますます熱がこもり出す。みんな、手も口も忙しい。沖縄の太鼓と三線の演奏による民謡が始まると最高潮に達し、海外からのお客さんも踊り出す。

あっという間に時間が過ぎてゆく。私は、沖縄の人たちが差し入れてくれたという古酒（クースー）に少々酔ったようだった。プログラムの「雨水コント」への出演を、前もって依頼されていた。会場がかなり盛り上がっているからと中止になったので、わが「名（酩）演技」をお見せできなかっことが、さすがにうれしい。

私に与えられた役は、中国雨水調査のヤオトンの場の通訳だった。会話の半分は中国語なので、あらかじめ中国語らしき言葉を考えていた。ご存じ「笠地蔵」の、おじいさん役を割り振られた松本正毅さんは、セリフを出雲弁でやる予定だったと笑っていた。

大まじめにバカをやることも、市民の会の健康のためにはいいのではないか、と思う。

報告

すすむ「雨水事典」づくり

—水琴窟見学なども計画—

雨水事典制作チーム

■ 長尾 愛一郎 ■

この五月に会報とともに「雨水事典」情報カードをお送りしたところ、十名の方が情報やご意見をお寄せ下さいました。ありがとうございました。参考にさせていただきます。今後ともみなさんからのお便りをお待ちしております。

* * *

四月に発足した「雨水事典」制作チームは、月に一回のペースで編集会議を開いています。会議では、事典の骨格となる六つのテーマ（雨の現象を知る、雨を楽しむ、雨がつちかう、雨をためて使う、生命はぐくむ雨、雨水こぼれなし）を中心に、メンバーが調べたり現地取材したものを報告しています。

雨がつちかう文化ひとつ取っても、雨にまつわる言葉・ことわざ・文学、雨具、雨乞い、など奥の深いものばかりです。しかし尻込みしてはいられません。今回の事典の場合、自分たちの足と目で確かめたものを形にしようという精神で取り組んでいます。古事記や万葉集、宮沢賢治や藤沢周平も、雨の視点で読むと「市民の会」ならではの解釈ができるかもしれない、そんな雰囲気のなかで会議は進行しています。

雨水利用自治体・市民フォーラムでは、制作チームとしてポスター・セッションに参加し、また英文のアンケート用紙を作つて外国の参加者から事典の情報を得ようと試みました。まだ十分な反応はありませんが、今後もつづけていきます。

なお、十月後半の土曜日、三島市長照寺の水琴窟の見学、柿田川湧水を守る方々との交流を計画しています。どなたでも参加できます。詳細は決まっていませんが、参加をご希望の方は事務局までお問い合わせ下さい。来年の春には、伊豆七島利島（としま）の雨水利用の見学も予定しています。詳しくは追ってお知らせします。

21世紀の健全な水環境のために

「日本水大賞」創設される ~11月30日まで募集中

21世紀にも、安全で、きれいでおいしい水のある日本でありたいー、そんな願いに貢献している活動や研究、技術開発を支援する賞が、このほど創設されました。主催は「日本水大賞顕彰制度委員会」で、委員長は高橋裕東京大学名誉教授です。現在、専門部門、市民部門にわけて、水環境・水資源・水文化・水防災などに役立っている市民活動、技術開発などを、募集しています。

賞金は、大賞100万円、副賞は2件、それぞれ50万円で、他にもいくつかあります。

今年度の応募締切りは、11月30日です。

◆問い合わせ・申請用紙の入手・送り先

④102-0092 千代田区隼町2-13 US半蔵門ビル

(社)日本河川協会内 日本水大賞顕彰制度委員会 事務局(担当:赤川、館澤、紀陸)

☎03-3238-9771 FAX. 03-3288-2426

ホームページ <http://www.mesh.ne.jp/japanriver/mizutaisyou/>



ひねまほ



高橋 泰子さん

大阪の出身である。父親が戦死、母親が再婚したことから姉と二人、料亭を営む、独身の伯母の養女になった。陽気な気性を買われて、家の後継ぎにと期待されて育てられたが、琴や踊りなど習いごとがイヤで「逃げ回った」という。

女に学問はいらない、と禁止されても「押し入れに電気スタンドを引き入れて読む」ほどの本好き。14歳のとき、京都の高名な八卦見に連れていかれた。「この子は、字を見る仕事につく」と言われ、養母はようやく、諸々のことを諦めたのだそうだ。

最近、多摩ニュータウンの住居の近くに、エコロジーショップを開店する準備に忙しい。「店の前にドンと雨水タンクを置いて、屋根には太陽パネルを取り付ける予定。行政だけでなく、雨水タンクを多摩に普及させる拠点を作りたい」と抱負を語る。

東京の空は、あまりに汚れている。今日明

日のレベルで変えられるものでもなく、タンクの底にはヘドロが分厚く溜まる。「だから、女の視点からみて、タンクはやはりフタをとって水の状態を見、洗えるものがいい」という。炭やジャリを底に敷けば、更に浄化できる。ここ2年近く、炭焼きの活動をしているので自前の炭を活用するつもりだ。

「和風の庭に似合うタンクも欲しいね。周りをぐるりと囲う木や篠竹のスダレを作ろうかなと考えてる」。そういう自然素材の製品や安全な食品、雨水タンクなどの販売と取付け、イベントの企画。環境共生住宅について相談に乗ったり、工務店を紹介したりすれば、地域の活性化にも役立つ。

10月半ばに開店する、32m²の小さな店「楽屋 RAKU-YA」は、かなり重要な役割を果たしそうである。

小柄で、やわらかで、したたかな高橋さんご自身のように。(い)

◆新刊案内

「井戸と水みち」 北斗出版

水みち研究会 定価2200円+税

副題には「地下の環境を守るために」とあります。水みち——、聞きなれない言葉ですが、すてきな響きです。

私たちはともすれば地上の環境にのみ目を向けがちですが、地下もまた生きて、動いているという当たり前の事実に気づきます。

今は少なくなった井戸堀り職

人の方々の貴重な証言は、われわれの目にも、暗い地中を滔々と流れる水の姿、その水路のまぼろしを見せてくれます。

地上と地下を巡って、水は生きている。その循環が断ち切られ、地下の環境も瀕死の状態です。

名水は日本の食文化を支えてきました。地下の環境を守ることは、地上の環境だけでなく文化をも守ることだと説く、貴重な一冊です。



◆村瀬事務局長

「世界をマタにかける」

墨田区でのフォーラムが幕を閉じた翌日、村瀬さんはストックホルムへ向かいました。当地で開かれた「国際水シンポジウム」に出席するためです。帰国して半月余りのち、9月初めには中国へ。今度は「国際雨水シンポジウム」に出席する、という慌ただしさでした。

ストックホルムでは、日本の雨水利用について報告をし、中国では会議の座長を務める活躍ぶりです。

世界各国からの参加者は、私たちの市民の会の雨水利用を進める活動に、非常に注目したそうです。都市の雨水利用という点にも、市民・事業者（技術者）、行政が共に雨水利用を進める市民運動に結集している点にも。先進的活動、などと驚かれると、かえって驚いてしまいますが、とにかく一人ひとり自発的に、地道に、これからもがんばりましょう。

事務局だより

田中 清子

9月に入っても残暑が厳しいですね。皆様お元気ですか。

市民フォーラムが終了し、やっと日常がもどってきました。事務局スタッフ3人は、市民フォーラム雨水利用交流会の準備委員を兼ねていましたので、7月20日以降は準備のために事務局に詰めている余裕もない程でした。

さて、当夜は200余人の参加者があり、広い会場は多くの外国人も交えて満員の盛況となりました。地元のお囃子のにぎやかな調子で開会となり、沖縄の太鼓と三線の演奏が始まると同時にアルコールも手伝って最高潮。雨水利用への展望が着実になった手ごたえがあったのかどうか、踊っている間にそんな固いことはどうでもヨロシイ……!! (否)

なにしろ、準備委員は両日とも全然会議会場をのぞくゆとりもなく、今回のフォーラムの実感は抱めないままです。これから報告書などで、共通の認識を得るために努力をする他はありません。

そこであえて発言させていただくならば、フォーラムを終えて後半の活動に移行していく「全国市民の会」の自主企画による連続講座などを実施できないものでしょうか。

準備委員の反省会でも、会員が共通の認識を深めあい、学びあえる機会が必要ではないか、という意見が多数ありました。会員内外から講師を迎えてセミナーを開催してはいかがでしょうか。事務局も有志もその実現のためにならば努力と時間を惜しむものではありません。

(去る5月6日に、雨水利用をすすめる全国市民の会総会が開催され、97年度の決算報告と今年度の予算案が承認されました。たいへん遅くなりましたが、この会報と一緒に別紙にて、会員の皆様にお届けいたします。)

フォーラム参加者

	7日	8日
自治体	193	82
企業	206	234
個人	166	246
その他(報道・招待等)	39	22
外国人	18	18
合計	622人	602人

現地視察

	墨田コース	埼玉コース
参加者	44人(28)	34人(34)
従事者	5人	8人
合計	49人	42人

※()内は有料参加者数



- 8月7日・8日と、2日間にわたったフォーラムの詳細は、10月末ごろ「報告集」として、皆さまのお手許に届けられる予定です。
- 表題の「あまみず」というデザインが、今回から変わりました。イラストレーターの松本真理子さんが描いてくださいました。時代に合わせてホームページのアドレスも記載しています。
- 編集にも少しずつパソコンを使っていますが、なかなか上手くできません。内容やレイアウトについてのアドバイス、雨水利用に関する情報など、お寄せいただければ幸いです。(糸賀 幸子)